様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２６０７
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ１３４２７

研究課題名（和文）ベルギーにおける幻想文学の語圏越境的研究

研究課題名（英文）A cross-lingual study on fantastic literature in Belgium

研究代表者
三田　順（Mita, Jun）

北里大学・一般教育部・准教授

研究者番号：２０７２３６７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究を通じて、ベルギー・オランダ語圏において象徴主義が従来考えられていたよりも早い時期に受容され、かつフランス以上に同郷のフランス語圏の象徴主義運動から多くの影響を受けていたことを明らかにすることができた。フランス語文学においては、「現実的幻想」を手掛かりとして象徴主義世代と次世代との繋がりを指摘すると共に、この詩学が第二次世界大戦後にオランダ語圏で展開した魔術的リアリズムにも共有されており、象徴主義に端を発する幻想詩学の系譜が、次世代、及びオランダ語圏においても認められ、世代、語圏を超えた射程を有するベルギー特有の幻想詩学の伝統の一端を成していることを明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
オランダ語圏文学において象徴主義がこれまで考えられていたよりも早い時期に受容、実践されていた例を示したことで、従来のオランダ文学史記述の見直しが期待される。また、伝統的に幻想文学研究では、多く日常とかけ離れた世界を舞台としていること、詩という形式で主に展開したことで象徴主義文学がその対象から除外される傾向にあったが、散文に多くの重要な作品が生まれたベルギーにおいて象徴主義が幻想文学の源泉の一つであることを示したことで、幻想文学史における象徴主義の再評価が期待される。本研究によって得られた知見を広く還元するため英語を始めとする国際的学術言語で成果を発信することに努めた。

研究成果の概要（英文）：This research project showed that symbolism was practiced in Belgian Dutch-speaking literature earlier than previously thought, and that the latter was more influenced by the French-speaking symbolist movement in Belgium than by the one from France. In the section focusing on French-speaking literature, we used the poetics ‘real fantastic’ as a clue to point out a link between the symbolist generation and the next. Moreover, it was argued that this poetics is shared by ‘magic realism’, which developed in the Belgian Dutch-speaking scene after the Second World War. Building upon these results, we shed light on the origins of this poetics of the fantastic in Belgium, which can be found in the symbolist movement, and revealed that it was passed on to the next generation as well as Dutch-speaking literature, thus forming a distinctive fantastic poetics in Belgium that reaches well beyond generations and the boundaries of language.

研究分野：比較文学

キーワード：幻想文学　ベルギー　魔術的リアリズム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

ゲルマンとラテン文化の交錯・混交する地としてのベルギーの象徴主義運動を考察したこれまでの研究を通じ、所謂象徴派世代と、次世代との関係に関心を抱いた。一般的にベルギーにおける文学史では象徴主義は前衛芸術が次々と登場した二十世紀初頭、急速に批判対象となり、忘却されたものと位置付けられるが、第一次世界大戦以降フランス語圏に多く表れた「幻想的」作風の作家を手掛かりとして、象徴主義という運動をベルギーの二十世紀文学の雛形の一つとして再評価できるのではないかと考えた。その先駆的、代表的作家の一人であるフランス・エレンスは、自身のシュルレアリスム論、幻想文学論で「現実」の重要性を説いているが、これは象徴主義世代において「現実的幻想」として既に論じられていたものと同質の詩学であり、世代を超えて受け継がれたベルギー独自の幻想美学の一例と考えられる。これに加えて、フランス語圏の前衛文学運動にやや遅れてオランダ語圏に登場した「魔術的リアリズム」との関連に興味を抱いた。ドイツ生まれの前衛美学である「魔術的リアリズム」は、言語を同じくする隣国のオランダではインパクトを残さなかったが、ベルギーのオランダ語圏ではヨーハン・デーネ、ヒューベルト・ランポーといった重要な作家らによって重要な文学潮流となっている。「魔術的リアリズム」の本質にある「魔術」と「リアリズム」という一見相矛盾する傾向の混淆は、ベルギー・フランス語象徴主義からエレンスへと受け継がれた「現実的幻想」という幻想詩学と近い位置にあると考えられる。同じオランダ語圏のオランダにおいて「魔術的リアリズム」が展開しなかった事実に鑑みると、ベルギーのオランダ語作家達は、同じ国内でありながら、言語問題によって言わばライバルでもあったフランス語圏の同時代文学から直接影響を受けた可能性が浮かび上がり、言語圏を越境した「ベルギー的」幻想美学の所在を考察する本研究を構想するに至った。

２．研究の目的

(a)　19 世紀末のベルギー・フランス語圏を席巻した象徴主義は、若き国家ベルギーが最初に国際的な存在感を示した文芸運動である一方で、フランス同様、20 世紀に入ると急速にその影響力を失い、ダダイスム、シュルレアリスムといった 20 世紀初頭のヨーロッパに次々と登場した前衛芸術運動の批判対象となったことから、次世代に及ぼした影響については過小評価されてきた。ベルギーにおける象徴主義を考察したこれまでの研究を通じて、「現実」と「幻想」という相反する特質が混淆した所に、写実主義絵画の伝統を意識した「ベルギー的」な象徴主義美学が生まれたことを指摘してきたが、このモデルが、20 世紀ベルギーの文芸にも適用可能であることをフランス・エレンスの幻想論を手掛かりに明らかにする。同時に、従来、自然主義が中心になったと考えられてきた近代オランダ語圏の文学において、フランス語圏の象徴主義美学が重要なモデルとなっていたことを指摘し、象徴主義を言語圏、芸術ジャンルを超えた、20 世紀ベルギー文化の雛形として再評価することを試みる。

(b)　20 世紀初頭のフランス語圏では、シュルレアリスムの他、「ベルギー怪奇派」とも呼ばれる幻想作家たちが存在感を示すが、これにやや遅れて第二次世界大戦中に姿を見せ始めたオランダ語圏の「魔術的リアリズム」との影響関係を探る。この時期のベルギーは、国内の言語問題が激化しており、言語間を隔てる壁が厚くなりつつあった。ベルギー本国でも、フランス語圏とオランダ語圏の文学の比較研究は盛んとはいえず、「魔術的リアリズム」は仏語圏のエレンスの幻想文学やシュルレアリスムの同時代的潮流としてのみ見なされ、その直接的な影響関係の可能性についてはこれまで学究的に考察されていない。そこでオランダ語圏における「魔術的リアリズム」の先駆者デーネが、同郷のエレンスと接点を持っていた事実と、その美学的類似に着目し、両者を比較考察することで、フランス語圏の文学がオランダ語圏の幻想文学に与えた直接的な影響の可能性、言語圏を越境する美学の所在を検討する

３．研究の方法

フランス語圏文学についてはベルギー・フランス語文学における幻想文学と象徴主義の影響関係についての分析から始め、特に象徴派世代と次世代のエレンスの幻想美学との共通点を探る。具体的にはエレンスの幻想的作品及び幻想文学論を精査し、「ベルギー的」象徴主義美学との類似点を分析しつつ、それが彼自身の幻想文学作品群にどのように指摘され得るかを検討する。

オランダ語圏については象徴主義の受容状況を再検討することから始め、フランス語圏より十年遅れてオランダ語文学の近代化を図った文芸誌『*Van nu en straks*』の調査を行う。オランダ語文学史においては従来自然主義がオランダ語文学の近代化において中心役割を担ったとされてきたが、『*Van nu en straks*』誌の主幹であったアウヒュストヴェルメイレンは、同じベルギーのフランス語圏の影響の方が寧ろ強かったと明言している。初年度は本誌の創刊年を中心に調査し、オランダ語圏における近代文学の展開とフランス語圏の象徴主義との関連を明らかにする。

続いて、二十世紀前半のシュルレアリスム、ベルギー怪奇派の美学に（フランス語）象徴主義文学が与えた影響を明らかにしつつオランダ語圏との比較考察に入る。特に 20 世紀のベルギー・フランス語シュルレアリスム、幻想文学とオランダ語文学で展開した「魔術的リアリズム」文学

の直接的影響関係を、それぞれを代表するエレンスとデーネを中心に考察することで言語圏を越境する幻想美学を抽出しつつ、最終年度にはその現代文学における展開を辿る。

４．研究成果

初年度は、ベルギーのフランス語圏における象徴主義と幻想文学の連関を探るにあたって、文献収集を始めとする基礎的調査を主に行う予定であったが、一定の成果も形にすることができた。九月には「風景」という観点からフランス語圏の象徴主義を再考するシンポジウムに招かれ、ベルギーの事例について文学と絵画の比較芸術学的観点から研究発表を行い、その後論文が論集に収録された。またこれまでに取り組んできたベルギーにおける象徴主義研究の成果に、象徴主義後の幻想文学の展開を比較芸術学的手法で論じた論考を加えた形で単著を公刊することができた。

他方、20 世紀中盤のオランダ語幻想文学の考察に先立ち、これまで 20 世紀初頭にわずかに実践されたに過ぎないと考えられてきたオランダ語圏における象徴主義の受容を再考するため、1893 年に創刊された文芸誌『*Van Nu en Straks*』誌の初期における言説分析に取り組み、19 世紀末におけるフランス語圏の象徴主義運動からの影響を調査した。これまでのオランダ語文学史においては、フランス語圏に十年ほど遅れたオランダ語圏の文学革新運動では自然主義が中心となり、象徴主義は大きなインパクトを残さなかったとされてきた。確かにオランダでは明らかに自然主義の作家達がその中心を担っていたが、ベルギーのオランダ語文学の近代化を担った文芸誌『*Van nu en straks*』誌を創刊したヴェルメイレンは、本誌の創刊に当たっては同じ言語圏のオランダよりも自国のフランス語文芸誌を範としたと記している。創刊年に発表されたヴェルメイレンの文学論や文芸作品を分析した結果、同時代に隆盛を極めていた同郷フランス語圏の象徴主義文学から少なからぬ影響を受けていたことが明らかとなった。この成果についてはまず 2018 年度にベルギーで開催された国際オランダ学会で発表し、その後学術論文として国際誌に投稿し、査読の結果を待っている。並行してウクライナで開催された国際シンポジウムにおいて、ベルギー・フランス語圏の象徴主義文学にみられるアイデンティティーのアンビヴァレントな現れについて翻訳という観点から論じた研究発表を行い、その後英語論文として論集に収録された。

次いで「ベルギー怪奇派」ともいわれる、第一次世界大戦後のフランス語作家とオランダ語圏の魔術的リアリズムの作家との比較考察へと移り、特にオランダ語圏の魔術的リアリズムを代表するヨーハン・デーネのデビュー作および作家自身の記した「魔術的リアリズム」論に注目し、エレンスの「現実的幻想」と、現実と幻覚の境界が曖昧になる狭間の世界を描くデーネの「魔術的リアリズム」が多くの点で共通していることを比較検討した。この成果の一部はボストンで開催された Northeast Modern Language Association の 2019 年度年次大会において発表し、現在論文としてまとめる作業を進めている。

最終年度は約一年間欧州に滞在する予定であったが、2019 年度末から全世界的に流行している新型コロナ感染症の影響により渡航が無期延期となった。本来 2020 年度に予定していた研究計画は渡航先の施設を利用することを前提としたものであったことに加え、エントリーが決定していた国際学会はすべて延期ないし中止となったために研究計画の大幅な見直しを迫られた。これを受けて、本年度に現地調査を前提に計画していた課題を大幅に修正し、理論的なアプローチでの研究へと変更した。具体的には、フランスを中心に展開した幻想文学の定義を巡るこれまでの議論を整理し、その定義の前提、範囲、問題点を比較検討した。幻想を巡る先行研究においては、日常に侵入する「恐怖」の感情が前提とされてきたが、それとは微妙に異なる「不気味さ」という情動に着目し、フロイトの「不気味なもの」の理論を再検討した。これを理論的基盤としつつ、ロボット工学の分野で知られる「不気味の谷」理論を組み合わせてヴィルヘルム・ハマスホイの一見写実的な室内画の喚起する違和感の解明を試みた考察を、まずオンラインで開催されたイギリスの国際学会において発表し、その成果を英語論文として投稿した。年度後半にはベルギーにおける幻想文学の系譜を、フランスとは異なる風土が生んだ地詩学的という観点から考察し、ベルギーの幻想文学における象徴主義の重要性を指摘した研究発表をポーランドの大学が主催したオンライン学会において行い、これについてもその後学術論文として国際誌に投稿している。その他、ベルギーのワロニー地方で展開した象徴主義文学を地詩学的観点から論じた仏語論文が国際誌に掲載された。当初本年度予定していた、80 年代以降の事例の検討を行う計画からは大きな変更を余儀なくされたが、象徴主義に端を発する幻想詩学の系譜が次世代、そしてオランダ語圏において認められ、時代、語圏を超えた射程を有するベルギー特有の詩学の伝統を成していることを一定の範囲内で明らかにすることができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Mita, Jun	４．巻 0
２．論文標題 Flemish Identity in Translation. Georges Rodenbach and the Ambivalence of the ‘Mythe Nordique	５．発行年 2020年
３．雑誌名 National Identity in Literary Translation.	６．最初と最後の頁 171-180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3726/b16418	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Mita, Jun	４．巻 2
２．論文標題 La Reception du symbolisme en Wallonie et la formation de l’esthetique nordique. Une analyse de L'ame des choses d’Hector Chainaye	５．発行年 2020年
３．雑誌名 XXI. Congress of the ICLA Proceedings. Vol 2. Literary Translation, Reception, and Transfer	６．最初と最後の頁 441-453
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/9783110641998-035	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　1件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 Jun Mita
２．発表標題 Flemish Magic Realism. Its Origin and Concept
３．学会等名 Northeast Modern Language Association 51st Annual Convention（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 三田順
２．発表標題 ベルギー・オランダ語文学における象徴主義受容再考――第一期『ヴァン・ニュー・エン・ストラックス』誌を中心に――
３．学会等名 日本比較文学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Mita, Jun
２．発表標題 Het symbolisme en de eerste reeks van Van Nu en Straks. De receptie van het symbolisme in Vlaanderen op het einde van de negentiende eeuw.
３．学会等名 20e Colloquium Neerlandicum（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Mita, Jun
２．発表標題 Georges Rodenbach and the ambivalence of ‘ le myth nordique
３．学会等名 National Identity In Translation（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 三田順
２．発表標題 ベルギーにおける象徴主義と音楽 ――作曲者としての作家と画家――
３．学会等名 ベルギー音楽研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 三田順
２．発表標題 風景としての室内――ベルギーにおける象徴主義的室内画を巡って――」シンポジウム「象徴主義における＜風景＞
３．学会等名 シンポジウム「象徴主義における＜風景＞」（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Mita, Jun
２．発表標題 Uncanny Interior. Vilhelm Hammershoi's Interior Paintings as “Uncanny Valley”
３．学会等名 The Uncanny in Language, Literature and Culture（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Mita, Jun
２．発表標題 La genese de la poetique nationale. Le Fantastique reel en tant que geopoetique de la Belgique
３．学会等名 IIme Colloque International. INSPIRATIONS 2020. La litterature et la carte geographique（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計2件

１．著者名 坂巻康司、三田順他共著	４．発行年 2018年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 392
３．書名 象徴主義と〈風景〉――ボードレールからプルーストまで	

１．著者名 三田順	４．発行年 2018年
２．出版社 松籟社	５．総ページ数 488
３．書名 想像された「北方」――象徴主義におけるベルギーの地詩学を巡って――	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Nederlands in Japan
https://www.neerlandistiek.nl/2019/09/nederlands-in-japan/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関